



Title	ローベルト・ヒンダーリング/ルートヴィヒ・M・アイヒンガー共編『中央ヨーロッパ少数言語ハンドブック』
Author(s)	諏訪, 功
Citation	言語文化, 34: 121-125
Issue Date	1997-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/8887
Right	

ローベルト・ヒンダーリング／ルートヴィヒ・M. アイヒンガー共編
『中央ヨーロッパ少数言語ハンドブック』

諏訪 功

本書の中核は、バイロイト大学の研究プロジェクト「中央ヨーロッパの少数言語」である。序文によると、このプロジェクトは1981年に具体的な形を取り、ドイツ学術振興会の資金援助を得て1982年に開始され、1991年に完了した。9年におよぶ研究の成果は、その後5年の時日をおいて1996年8月に刊行された。

全体は序文と以下の17章に分かれる。

1. 「北フリースラント、北フリースラント人、北フリジア語」
2. 「デンマークにおけるドイツ語少数民族とドイツにおけるデンマーク語少数民族」
3. 「ソルブ人——ドイツ東部のスラブ民族」
4. 「ブルゲンラントのクロアチア人」
5. 「ケルンテンのスロヴェニア人」
6. 「シュタイアーマルクのスロヴェニア少数民族」
7. 「ムール河のスロヴェニア国境地帯に残るドイツ語少数民族」
8. 「南チロル」
9. 「フェルゼンタール人とキンベル人の孤立言語圏」
10. 「アオスタ地帯のドイツ語孤立言語圏」
11. 「ラディン地方」
12. 「スイスのレトロマンズ語」
13. 「西スイス」
14. 「アルザス」
15. 「ルクセンブルク」
16. 「ベルギーのドイツ語地域」
17. 「低ドイツ語」

各章の題名からわかるように、本書はドイツ語圏と、その内部または周辺にあるさまざまな言語圏との複雑な絡み合いを記述したものである。その際、ドイツ語は4., 5. の場合のように多数言語であるときも、8., 16. の場合のように少数言語であるときもある。また歴史的にみると、3. の場合のように、元来その地で語られていた言語の勢力範囲を侵してひろがる優勢言語であるときも、また8. の場合のように、他の言語によって勢力範囲を狭められた劣勢言語であるときもある。いずれの場合も、ドイツ語を軸に、その消長を記述し、それと表

裏一体をなす他の言語の消長を記述していることは同じである。

ドイツ語がある時は多数・優勢言語であり、ある時は少数・劣勢言語であるという状況を確認すること、これは、ドイツ語を母語とする人々に反省を促すきっかけともなる。たとえばドイツ語はケルンテンでは多数言語であり、スロヴェニア語に対し優位に立っているが、南チロルでは少数言語であり、イタリア語に対し自己主張を強いられている。しかしドイツ語話者が南チロルにおいて少数言語話者としての権利を主張するならば、同様の権利をケルンテンのスロヴェニア語話者に対しても認めなければならない。自己が要求する権利を他者に対して拒むのは、少なくとも公平を欠く。これは他の言語と、それを母語とする人々についても言える。

本書の最大の特徴は、各章の記述がおおむね次の統一パターンに従って行われ、相互比較が可能となっていることである。

1. 地理上の位置（地図を添えて）
2. 一般的統計と人口統計
3. 歴史
4. 経済、文化、政治上の特徴
5. 社会言語学上の状況
6. 法的地位
7. 地域ごとの言語慣用（または：言語状況と言語慣用）
8. 諸要因の特性（または：まとめ）
9. 文献

この際、重点は6., 7., 8.におかれ、調査者は担当地区に最長5週間滞在し、アンケート方式で、調査用紙を用いて作業を行った。調査方法に関して特筆されているのは：1. 調査者がインタビューの間、あるいはその後（被調査者に記入をゆだねず）自分で調査用紙に記入を行ったこと、2. 調査用紙には選択式の回答のほか、被調査者の自由回答を記録するための欄も設けられていた、という点である。

本書によると、当該の地域において少数言語であるにもかかわらず、比較的安定した地位を保ち、今後も保ち続けるであろう言語は、西スイスのフランス語、南チロルのドイツ語、ベルギーのドイツ語であり、これに反し危機に瀕しているのは、ブルゲンラントのクロアチア語、シュレースヴィヒ・ホルシュタインのデンマーク語、北フリジア語、ドイツ東部のソルブ語、そしてほとんど死滅寸前と言ってもよいのが、北イタリアのいくつかの孤立言語圏で話されているドイツ語（あるいはその変種）である。これらの異なる現況を生み出している原因はいろいろある。

たとえばスイスのフランス語は100万以上、南チロルのドイツ語は約30万、ベルギーのドイツ語は約10万の話者を持つ。話者数に加えて経済・文教政策上の諸事情がある。西スイスにはもっぱらフランス語で授業を行う大学が3校、部分的にフランス語で授業を行う大学が1校、工科大学が1校ある。また著名な「スイス・ロマンド・交響楽団」、時計産業を初め

とするいくつかの重要な産業があり、ジュネーブには多くの国際機関が存在している。フランス語は、スイス全体ではドイツ語に対し少数言語であるが、これらの要因に支えられて、安定した地位を保ち続けている。一方、話者数において西スイスのフランス語と匹敵するアルザスのドイツ語の場合、事情はまったく異なる。たしかにストラスブールには大学が2校あるが、それは多数言語であるフランス語にいわば独占されているし、国際機関（ヨーロッパ議会）もあることはあるが、これは別にドイツ語の地位強化には役立たない。つまり言語の地位を支える下部構造が、アルザスではすべて多数言語フランス語の地位強化に役立つものとなっているのである。

本書の出発点は、ヨーロッパの少数言語が、「ひそかに忍び寄り、ほとんど目に映らないだけに、かえって隠微な、特殊な危機」にさらされているという認識である。たとえばベルギーのドイツ語話者は、まったく問題なくドイツのラジオ、テレビを受信できるし、ドイツの新聞・雑誌を購入することも、アーヘンやケルンの劇場に芝居を見に出掛けることもできる。これは当たり前のことのように思われるが、少なくともシレジアのドイツ語少数民族にとっては、つい最近まで不可能であった。鉄のカーテンが取り払われたことにより、個人的な行動の自由はかつての社会主義圏でもひろく認められ、いまではシレジアのドイツ語話者も、少なくとも理論上は自由に、旧西ドイツを含む自由主義圏へ行くことができるし、相互の言語交流を阻むものは何もない。言語上の「民族浄化」の強行など問題になりえないというかぎりでは、現在のヨーロッパでは少数言語の権利、それを話す個人の自由は保証されている。しかし個人の自由を最大限認めることは、集団権の承認、たとえば少数言語による学校教育の実施を保証することとは、かならずしも直結しない。言語上の（そしてまた他の意味での）少数派の存続を保証するものが、集団権の確立以外にはないという事実を忘れてはならないということ、これが本書で力説されているポイントの一つである。

南チロルにおいては、1918年に始まったイタリアの言語支配に抗して、ドイツ語を母語とする人々とラディン語を母語とする人々が、数十年にわたる忍耐強い闘争を通じて、それぞれの集団の権利を勝ち取っている。210ページの記述によると、この闘争の終結宣言は、1992年6月17日、オーストリア政府から当時の国連事務総長ガリ氏に伝えられたとのことである。1972年のいわゆる「包括法」(Paketgesetz)の89条によると、公務員のポストは、イタリア語、ドイツ語、ラディン語の言語集団の割合によって人数が定められる。この際、言語集団の割合は10年ごとに行われる国勢調査の結果にもとづいて定められ、その際各人は自由意思に従って「民族帰属申告」(Volkszugehörigkeitserklärung)を行うことになっている。このような人口による比例配分(Proporz)も、少数言語の存続を保証する集団権の一つである。この比例配分は、少数言語による地名・駅名表示にも及ぶ。本書の記述によると、ボルツァーノ州のラディン語地域では、イタリア語、ドイツ語、ラディン語の3カ国語による地名表示さえあり、ザクセン州とブランデンブルク州の駅でもソルブ語の駅名表示が見られる。しかしシュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州では、デンマーク語あるいはフリジア語の駅名表示はおろか、ドイツ語との併記さえ拒まれていたとのことである。

少数派の存続を保証する集団権として本書が挙げているのは、南チロルにおける「比例配

分」方式のほか、スイスにおける「領土原則」(Territorialprinzip)とドイツ・デンマーク国境地域における「宣言原則」(Bekennnisprinzip)である。前者は特定地域においてある言語にいわば独占的な地位を与え、他の地域における他の言語との共存をはかるものであり、後者は話者に特定言語への帰属を自由に表明させ、その表明をそのまま認めるというものである。ただしこの場合、たいてい話者が当該地域における多数派の言語を第一言語として表明したために、かえって少数言語の勢力減退を招いたという歴史的経緯がある。南チロルの「民族帰属申告」とほぼ同じ考え方にもとづいているのにもかかわらず、ドイツ・デンマーク国境地域における「宣言原則」が、まったく逆の結果を生んでいるのは興味深い。

公的には振興政策がとられたにもかかわらず、少数言語が衰退していった例としては、1949年から1989年のDDR時代におけるソルブ語がある。63ページから67ページにかけての記述によると、ソルブ人の言語と文化の保護と振興は、DDR時代、憲法上も保証され、さまざまな具体策もとられた。もっともソ連型社会主義体制のもとにあったDDRでは、ソルブ人の言語と文化の自立を声高に唱える人々は、次第に分離主義者として目立つようになり、ソルブ人の組織の指導層は、ほとんどもっぱらSEDの路線に忠実な共産主義者によって占められ、またすべての刊行物は検閲されるようになった。ソルブ語の章を担当したマドレーナ・ノルベルクは、「DDRの民族政策は、ソルブの民族意識を強化しないまま、ソルブ文化を維持しようとするものだった」と結論づけている。このような留保のもとにはあるが、いちおう一貫してソルブ人の言語と文化の保護と振興が続けられていたにもかかわらず、ソルブ語が衰退していったのには、さらにいくつかの具体的な原因がある。

本書で挙げられている原因としては、まず第一に、第2次世界大戦後、ナイセ河以東の地域から引き揚げてきたドイツ人難民が、ドイツ・ポーランド国境に近いドイツ語・ソルブ語地帯に定住したこと、次に農業の集団化により、ソルブ語が話されていた地帯の村落の生活形態が変わったこと、また最後にはラウジッツ地方の炭鉱が大幅に拡張され、これに伴って多数のドイツ語を話す労働者が流入したことがある。このような外的条件の変化によって、少なくとも母語としてのソルブ語は、公的な振興策にもかかわらず、衰退の道を迎えている。ドイツが統一され、少数言語の保護が社会主義的制約から解放された現在でも、ソルブ語の章の結語からバラ色の未来を読み取ることはできない。

他の言語との接触によってある言語が被った変化に関しては、「ベルギーのドイツ語地域」の章がもっとも詳しい。ここではフランス語からの干渉によって生じたドイツ語の変化が、さまざまな領域に下位区分されてスケッチされている。たとえば *telefonieren* 「電話する」が、フランス語の *téléphoner à...* の影響を受けて *an... telefonieren* のように用いられたり、*Ausbildung in den neuen Techniken* 「新技術の訓練」が、フランス語の *instruction sur...* の影響を受けて、*Ausbildung auf...* となるなどである。またフランス語起源の外来語の使用も、標準ドイツ語とくらべて格段に多い。

言語干渉による変貌を度外視しても、今まで一律に「ドイツ語」と呼んできた言語は、実はさまざまな変種から成る複合体である。南チロルの *taitsch* から低地ドイツの *Plattdeutsch* まで、ドイツ語は微細な差異を積み重ねながらドイツ語圏に広がり、その両端ではほ

とんど相互に理解が成り立たないほどの様相を呈する。このさまざまな変種、いわゆる Varietäten に関する諸問題は、マンハイムのドイツ語研究所 (Institut für deutsche Sprache) が1996年の年次総会において取り上げ、その成果は Varietäten des Deutschen: Regional- und Umgangssprachen/hrsg. von Gerhard Stickel.-Berlin; New York, 1997 としてまとめられている。ここではドイツ語の地域方言、およびそれと標準ドイツ語との中間に位置する「日常語」の地域の特徴を扱った論文がおさめられている。何をもちいてドイツ語とするかは、さまざまな問題をはらみ、一義的には決しがたい。しかし標準ドイツ語という共通の「傘」あるいは「屋根」に覆われているということ、そしてまた、フェルゼンタールの人々のように (本書 S.280), 「ドイツ人のグループに属しているという気持ち」 (das Gefühl, zur Gruppe der <taischen> zu gehören) を抱きつづけるということ、この二つが不可欠の条件のように思われる。

この二つの条件のうち、第二の条件、つまり民族としての帰属意識があっても、第一の条件が欠けている場合、たとえば3.のソルブ語、11.のラディン語のような場合、まさに集団権の確立がこれらの言語の存続を決定するように思われる。ソルブ語の章は低ソルブの作家 Jurij Köch の美しいことばで終わっている: 「わたしは世界をわたしの民族のやり方でしか思い描くことができない。このやり方がなくなるのは損失だ。しだいしだいに貧しさが国じゅうに感じられるようだ。ひょっとするとこの大陸、この星じゅうに。ひとつの色が減る。灰色が増す。音がひとつ、言語がひとつ減る。沈黙が増す。」 (S.67)

国際的なコミュニケーションの道具として、もっぱら英語の勢力が増大している今、たとえば話者数7万を割り込もうとしているソルブ語などに関心を抱くのは、経済効率から言うと引き合わないかもしれない。しかし「この大陸、この星じゅうに」ひろがっていく貧しさに対抗するためにも、また世界が灰色に塗りつぶされるのを防ぐためにも、本書においてドイツ語との関連で記述されている少数言語にも、より多くの注意を払うべきだと思う。

Handbuch der mitteleuropäischen Sprachminderheiten/hrsg. von Robert Hinderling und Ludwig M. Eichinger in Zusammenarbeit mit Rüdiger Harnisch und Ralph Jodlbauer und unter Mitw. zahlreicher Fachkollegen
—Tübingen: Narr, 1996